

小金井市「また明日」
デイホーム・保育所・寄り合い所
三位一体の“心を寄せ合う空間”



いくつになっても、いきいきと暮らせるまちをつくる

東京ホームタウンプロジェクト

TOKYO=HOMETOWN PROJECT

— お願い —

より一層みなさまの役に立つ資料をお届けするため、本誌に興味をお持ちになった理由や活用の可能性、ご意見・ご感想等をぜひお寄せください。以下 QR コードか URL より、アンケートフォームでのご回答を心よりお待ちしております。

http://bit.ly/tokyo_chiiki



※掲載内容は、2019年1月時点のものです。
最新の情報は「東京ホームタウンプロジェクト」ホームページにて
ご確認ください。

<https://hometown.metro.tokyo.jp/>

はじめに

この『地域づくりの台本』は、さまざまな活動に取り組んでいる地域団体・NPOのみなさま、地域活動を始めようとするみなさまに、日々の活動を運営する中で抱える課題を乗り越えるヒントとなることを目指してつくられています。個性的な取り組みを進める地域づくりの活動取材し、活動の根底にある考え方と、活動のなかでの印象的なエピソードから、他地域においてもヒントとして役立てられそうなポイントを描き出すことに挑戦しています。

地域づくりには、ひとつの「正解」などはありません。地域の特性や活動の歴史、関わる人の考え方などによって取り組み内容は変わってきます。読み手のみなさまは、この資料に描かれた内容について共感できる部分や、参考にできそうなものを選び取り、それぞれの地域活動へと活用していただければ幸いです。

こんな問題意識をお持ちの方に

本誌では、小金井市で、高齢者のデイホーム、乳幼児の小規模保育所、そして、地域の誰もが気軽に立ち寄ることができる寄り合い所の3つが融合した「地域の寄り合い所 また明日」取材し、幅広い世代が自然なかたちで、ともに時間を過ごし、心を寄せ合う居場所づくりの様子と、その背景にある運営者の考え方や運営上の工夫などに注目しています。

地域づくりに取り組む中で、次のような問題意識をお持ちのみなさまに、特におすすしたい内容です。

- 子どもからお年寄りまで交流できる居心地のよい空間をつくりたい。多世代が自然な形で交流している居場所について、成功している事例について詳しく知りたい。
- デイホームと保育所を同時に運営し、多世代交流を実現することに、興味はある。とはいえ、対象者も制度も異なる2つのサービスを同時に運営することで、どのような問題が起こるのか、どのようなリスクが想定されるのか、不安も大きい。多世代交流にともなうリスクをどのように回避して運営しているのかを知りたい。
- 利用者の主体性を大切に居場所をつくる上で、運営者側がどのようなことに気を配っていけばよいかを知りたい。特に、運営の代表者が、スタッフ等にどのようなことを伝え、どのような注意を促しているかを知りたい。

「東京ホームタウンプロジェクト」とは

団塊の世代が後期高齢者（75 歳以上）になる 2025 年に向けて、東京は、急速な高齢化が進展しています。こうしたなか、高齢者の介護予防や生活支援、生きがいづくりや社会参加の機会づくりなどに取り組む、地域団体や NPO など住民主体の活動に期待が集まっています。

東京ホームタウンプロジェクトは、「いくつになっても、いきいきと暮らせるまちをつくる」を合言葉に、東京の強みである活発な企業活動、豊富な経験と知識を持った多くの人たちの参加により、東京のさまざまなまちで活動する地域団体・NPO 等の活動を応援しています。

詳しくは、東京ホームタウンプロジェクトのホームページをご覧ください。

▶ <https://hometown.metro.tokyo.jp/>

この資料は「プロボノ」によって作成されました

仕事で培った経験・スキルを活かすボランティア活動のことを「プロボノ」といいます。

東京ホームタウンプロジェクトでは、地域団体・NPO 等による地域づくり活動の基盤強化を目的としたプロボノプロジェクトを推進しています。この「地域づくりの台本」を作成するプロジェクトも、東京ホームタウンプロジェクトの一環として、プロボノによって実現したものです。

本プロジェクトでは、日ごろ企業等に勤めるビジネスパーソン、及び「ママボノ」（育休・復職前のママによるプロボノ）のメンバーがプロジェクトに参加し、現場見学や団体の代表者へのインタビューをはじめ、スタッフ・ボランティア・利用者等へのヒアリングを繰り返しながら、活動のエッセンスを抽出し、成果物としてまとめていきました。

【プロボノメンバーのご紹介】

（プロボノチーム：前期）今堀さん、井上さん、海老名さん、田中さん、東さん



（育休・復職前のママによるプロボノ

「ママボノチーム」：中・後期）

矢山さん

阿部さん

荒川さん

池田さん

小黑さん

友廣さん

永見さん

目次

1 小金井市「また明日」のご紹介	6
2 「また明日」への思い	11
3 「また明日」の社会的な意義	13
4 利用者との関わりのポイント	17
5 「また明日」を支える運営・構造	19
6 最後に	22

1 | 小金井市「また明日」のご紹介

【概要】

「また明日」は、小金井市西部の住宅街にあるアパートの1階5世帯を繋げた多目的福祉施設で、地域の子どもからお年寄りまで多世代が自由に、思い思いに過ごせる場所です。

施設の運営は森田夫妻が行っています。地域との繋がりを大切にしており、商工会や町内会などに加盟し、積極的に参加しています。

「また明日」の特徴は、福祉施設としての機能のみならず、地域社会の絆を深める取り組みをしている点であり、地域住民がいつでも気軽に立ち寄ることができる多世代交流の場づくりをしています。

【基本情報】

名称	NPO 法人 地域の寄り合い所 また明日
所在地	東京都小金井市貫井南町 4-14-14 ヴィレッジ・パル 1 階
設立目的	<p>(定款第 3 条)</p> <p>この法人は、年齢・性別・国籍の違いや障がいの有無に関わらず地域に暮らす様々な人々に対して、同じ建物の中で高齢者在宅福祉事業と子育て支援事業及び児童の健全育成を図る事業を行うとともに、地域住民がいつでも気軽に立ち寄る事ができる一般開放スペースを併設して、高齢者在宅福祉事業を利用するお年寄りや、子育て支援事業を利用する乳幼児・その若い親世代、児童の健全育成を図る事業を利用する子ども達と、一般開放スペースに立ち寄った地域に暮らす様々な人々が、自由に交流できる機会を提供することで、失われつつある地域の絆を深め、その深い絆に元気づけられて、誰もが「また明日も頑張ろう」と自然に感じ、他者を思いやる心の余裕が芽生える、優しく豊かな地域社会づくりの推進に寄与することを目的とする。</p>
設立時期	<p>2006 年 6 月 20 日設立</p> <p>(2006 年 12 月 1 日にまた明日デイホーム、寄り合い所、認可外保育所 虹のおうちを開所、2015 年に認可保育所 また明日保育園を開所)</p>
運営団体	NPO 法人 地域の寄り合い所 また明日
スタッフ	<p>・森田眞希</p> <p>代表理事、また明日デイホーム・虹のおうち・また明日保育園総合施設長、寄り合い所コーディネーター、保育士</p> <p>・森田和道 (眞希さんの夫)</p> <p>介護福祉士、また明日デイホーム管理者</p>

	<p>・スタッフ 常勤スタッフ 4 名、非常勤スタッフ 18 名の合計 22 名（全員有給） 設立当時のスタッフは 1 名、初期からのスタッフは 3 名（10～12 年）</p> <p>・有資格者 保育士 6 名、介護福祉士 4 名、社会福祉士、音楽療法士（保育士）、 言語聴覚士（社会福祉士）各 1 名、資格がないスタッフもいる</p>
活動分野	<p>（定款第 4 条）</p> <p>(1)保険、医療又は福祉の増進を図る活動 (2)まちづくりの推進を図る活動 (3)子どもの健全育成を図る活動</p> <p>以上の活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡、助言又は援助の活動</p>
事業の種類	<p>（定款第 5 条）</p> <p>(1)高齢者在宅福祉事業：①介護保険事業、②介護保険事業に属さない高齢者在宅福祉事業 (2)子育て支援事業：①託児保育事業、②乳幼児の養育者への悩み事相談やアドバイス等の精神的な支援 (3)児童の健全育成を図る事業：①学童保育事業、②前 2 号の各事業へのボランティアを中心とした社会体験 (4)地域の寄り合い所事業：①年齢・性別・国籍の違いの有無に関わらず、地域に暮らす様々な人々がいつでも気軽に立ち寄って交流することが出来る場所の提供、②①に立ち寄った方々同士や、前 3 号の各事業の利用者との交流の促進 (5)広報、情報発信に関するネットワーク事業 その他、この法人の目的を達成するために必要な事業</p>
会員	<p>(1)正会員 入会金 10,000 円 年会費 5,000 円 (2)賛助会員 入会金 0 円 年会費一口 3,000 円（一口以上）</p>
収入	介護保険料、保育事業料、介護利用料、保育利用料
支出	家賃、人件費、食費、水道光熱費等（備品等は近隣から頂いているものも多い）
施設	<p>・また明日デイホーム（月～金曜日 9:45～17:00）：小金井市指定認知症対応型通所介護 利用定員：1 日 12 名 ・虹のおうち（月～金曜日 8:00～18:00）：認可外保育施設、定員 8 名 ・また明日保育園（月～土曜日 7:30～18:30）：認可保育施設、定員 12 名 ・寄り合い所（月～金曜日 10:00～16:00）：独自の地域福祉事業、地域の交流スペース、多くて 1 日 15 名程度が利用（日によって異なる）</p>

外部組織

・小金井市商工会会員、町会、消防団、小金井市福祉 NPO 法人連絡会、介護事業者連絡会、観光協会などに加盟、参加している。

【写真】



「また明日」の外観。
小金井市の住宅街のエリアにあります。ベランダ側に入り口があり靴を脱いで入ります。



「また明日」入り口の掲示板。
“どなたでも気軽に立ち寄れる”となっており、おひさまと虹の優しいロゴが迎えてくれます。



「また明日」入り口付近の看板と家庭菜園の野菜。
撮影時は茄子が美味しそうに実っていました。



「また明日」の室内風景。

5世帯分をリノベーションした1つの大きな空間となっています。この日は3部屋を開放して使用していました。撮影時は保育所の子どもが気持ち良さそうに昼寝をしており、隣の部屋でデイホーム利用者が皆でテーブルを囲み、歌を歌っていました。

親戚の家へ遊びに来たような居心地の良さを感じました。

【取材記事・調査研究・評価・表彰等】

※外部からの表彰・文献等のレビューによる情報収集等を実施

表彰歴：「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2009（事務局 社会福祉法人浴風会認知症介護研究・研修東京センター）「町づくり2009モデル」に選定・表彰

◆取材記事出典：<https://allabout.co.jp/gm/gc/374330/>

ALLABOUT「共に育ち支え合う地域の寄り合い所」執筆者：ボランティア ガイド筑波 君枝
子どももお年寄りも社会では最も弱い存在です。そして、「また明日」は、その弱い存在を守り支える施設です。でも、そこに集まってきたことで、子どももお年寄りもお互いを知り、力を出しあいながら、支えあうという光景が生まれていました。それは、二世帯、三世帯が同居している大家族や、かつての長屋のように濃い近所関係の暮らしの中では、自然に学んでいったことかもしれません。人との関係が希薄になりがちな今の時代は、人と関わり会う機会そのものが難しい面もありますよね。子どもや若い世代を取り巻く様々な課題に、コミュニケーション力の不足があげられますが、ゆるやかなつながりを築く地域の寄り合い所「また明日」のような場所は今の時代だからこそ求められている場なのかもしれません。

◆取材出典：<https://www.tbsradio.jp/79207>

2007.5.26 放送 TBS ラジオ「堀尾正明+Plus!」番組内コーナー『人権 TODAY』

「一つ屋根の下で保育・介護・地域交流」山崎景子キャスター取材

「また明日」はスタッフだけで作るのではなく、「また明日」にくる一人一人と一緒に作っていくものなんです。 「また明日」がこれからどんな場になっていくのかまた訪れてみたいと思う。

◆訪問記出典：<https://www.tvac.or.jp/news/15764>

ボランティア・市民活動の情報サイト「ボラ市民ウェブ」

トーキョー協働空間見学ツアー開催レポート内ツアー参加者の感想

「生活」を感じる建物と内装で、畳のお部屋に座るとほっとくつろいでしまいました。「人と人が協働する空間」というのは、人々の日々の暮らしの営みの中のひとつとして、融け込むようにあると、集う人たちにとっても、地域の人たちにとっても、行きやすい空間になるのかなと思いました。

人を年齢や障がい、介護度などで区分することなく、支えあう組織を、仲間と共に、じっくりと時間をかけて作り、実践していらっしゃる事が、円滑な運営につながっているのではないかと感じました。

ご高齢者と子どもたち、犬、タコ、そこで働いているスタッフ、森田ご夫妻、汗をかいて人のために働くという姿にとっても共感し心が洗われるような経験をさせていただき感謝しております。

◆訪問記出典：<http://npokizuna.jp/?cn=100018&bpg=42>

特定非営利活動法人地域の絆 代表理事中島康晴氏訪問日記

そこに多様な能力があることをしっかりと見据え、「地域の寄り合い所」は運営されていました。また、専門職にはない能力を高齢者や子どもたちは持っていて、専門職には成し得ない支え合いがそこで生まれていました。（中略）

「地域の寄り合い」は、自然発生的に、非専門的に出来上がった法人では断じてありません。そこには社会福祉の専門性、ソーシャルワークの視点を持った経営者が、見事なコーディネート力を発揮し、地域のニーズや人と人とを紡ぎ合わせてきたからこそ成し得た実践でした。（中略）

これからの福祉専門職に強く求められるのは、ネットワーキングやコーディネーションの力なのかもしれません。

2 | 「また明日」への思い

「また明日」には礎となる森田夫妻の思いがあります。そんな思いがあるからこそ、子どもからお年寄りまで誰もが居心地のよい、温かい居場所が存在します。

ここでは、インタビューを通して分かった森田夫妻の思いを紹介します。

■今、この瞬間を生きる

——私たちは普段、先回りしたり、焦りの気持ちを持ちながら生活していないだろうか。子どもやお年寄りをもっと痛切に感じているのではないか。「また明日」は、スケジュールを重視しないため、プログラムがなく、そのための準備もない。次の予定もあえて作らない。子どもたちが散歩に行くときに、寄り道をして目的地につかないこともある。てんとう虫がいたら子どもたちは見たいし、私たちも一緒に味わえばいい。

——スタッフには先回りをしないように伝えている。子どもやお年寄りと言葉を交わしているとき、それ以上に大切なことは他にない。「今」という時間を十分に味わい、「今」を先のために使わず、「今」を楽しむ。



森田和道・真希夫妻

■待つことの先にあるもの

——現代に生きる私たちは待つことがとても苦手である。スタッフはニーズに気づいても働きかけず、利用者同士の関わりが自然発生的に生まれるのをグッと待つ。そうすると、年上の子が年下の子に対して優しく手を差し伸べたり、おばあちゃんが泣いている子どもをあやすといった日常が生まれる。

皆、目の前にいる相手のためだけに自分ができることを行動にする。

——個々がもっている力を思う存分発揮してもらうためにスタッフがいる。これから起こることを予測したうえで待つことができこそ、プロフェッショナルであり、待つことで素敵な光景を見ることができるのである。

■唯一のルール

——プログラムもなければテレビもない「また明日」での唯一のルール、それは“挨拶をすること”。

「また明日」の中だけではなく、外で誰かとすれ違ったときにも必ず挨拶をする。挨拶を交わした人と次に会ったら、自然と会話生まれ、さらにプラスのやりとりへとつながっていく。挨拶はお金もかからず、とてもいい気持ちになる。

■ 普段着の専門家であれ

——仕事然として「どうぞご相談ください。」と言われても、打ち解けて本音で話すのはなかなか難しい。お茶を飲みながらの雑談に悩みごとの核心があるものだし、専門家だからこそ、気さくで話しやすい雰囲気をもっている必要がある。各分野に精通している専門家と繋がっておくことも肝要だ。専門家なら誰でもいい訳ではなく、“私が信頼している〇〇さん”に繋ぐことで、より細やかなケアを提供できる。

■ 「居場所」を作るとは

——居場所というのは、場所を作ることではない。心を寄せ合うことが大切である。福祉の援助が必要だと思われているお年寄りや子ども達であっても、心を寄せ合うことはできる。心を寄せ合う空間であれば、どんな場所であっても「居場所」であり、「寄り合い所」なのである。

3 | 「また明日」の社会的な意義

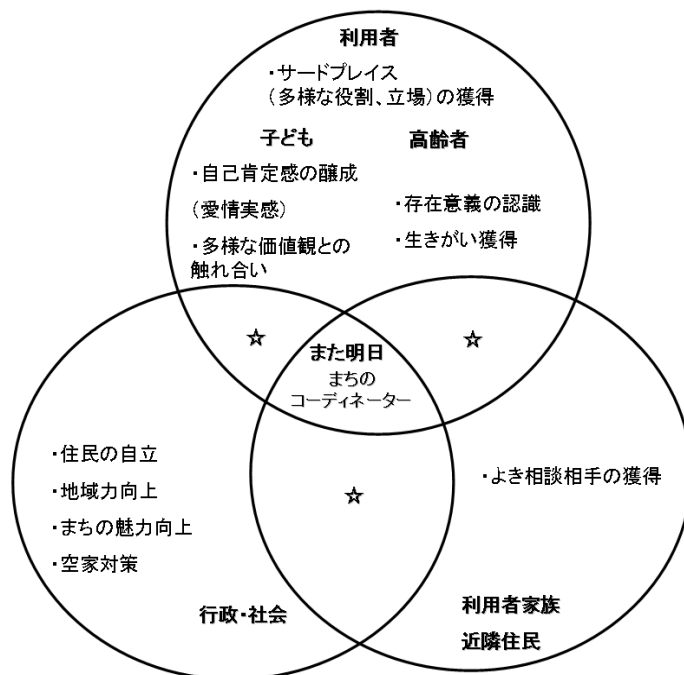
前章で「また明日」が森田夫妻の想いを基に運営されていることをご紹介しましたが、今回のインタビューを通して「また明日」が、関わる人々に様々な影響を与える、社会的な意義のある活動であるということも分かりました。

ここでは、「また明日」に関わる人それぞれにフォーカスを当てて、どのような影響を受けているのかご説明します。

(1) 「また明日」に関わる人々とその位置づけ

まず、「また明日」の関係者を「利用者」「利用者家族・近隣住民」「行政・社会」の大きく3つに大分しました。3つのカテゴリーは、「また明日」をハブとしてお互いに関わりを持っています。

3つのカテゴリーが交わる場所に「また明日」が存在し、関係者の「まちのコーディネーター」として機能しています。



(2)利用者

〔利用者全てに共通〕

▶サードプレイス（多様な役割、立場）の獲得

この「また明日」という場所は、家でもない、社会生活の場でもない、いわば第三の場所（サードプレイス）としての位置付けであり、ここでは、家や社会生活の場とは違った多様な立場や役割を担うことができます。

例えば、普段は介護をされる立場のお年寄りが、ここでは子ども達のお世話をする祖父母のような立場になれるのです。

〔子ども〕

▶自己肯定感の醸成（愛情実感）

「また明日」で保育を利用している子どもは、通常の保育所環境とは異なり、保育者である大人以外にもデイホーム利用者や寄り合い所に訪れる人々等と日常を共にします。つまり目をかけてくれる存在があり、彼らのコミュニケーションを受けとる事が可能です。また一方で目をかけてもらうだけではなく、子ども達が自ら手伝ったり支えたりとコミュニケーションを取ることもできます。こうしたやり取りの中、家族以外にも愛情のキャッチボールをすることができると実感する事で「自分は愛されている存在なのだ」という自己肯定感を育む事ができるのです。

▶多様な価値観との触れ合い

子どもの多くは、家庭や幼少期から過ごす保育所、幼稚園等からの影響を受けて育ちますが、「また明日」においては更に、保育者である大人以外にもデイホームを利用しているお年寄りや寄り合い所に訪れる人々とも接するため、より多様な価値観に触れることができます。

〔高齢者〕

▶存在意義の認識

「また明日」にはここで過ごすことにより、存在意義を感じることができる経験にあふれています。それは通常のデイホームと呼ばれる施設とは異なる、利用者以外の多様な人々の共存が大きく影響しています。彼らの存在により、いつも介護してもらって与えられる自分が、自然と自分から何かを与えたい、与える側の存在になりたいと思うきっかけや行動が生まれ、それがお年寄りにとっての存在意義につながっています。

▶生きがい獲得

一般的なデイホームでは1日のスケジュールが決まっており、介護福祉士の介助のもと、時間になるとすべき行動を促されるような流れになっていますが、「また明日」の特筆すべき点は、自分の意思で行動する場づくりをしているところです。

全ては一律に促されることがなく自然な流れが尊重され、日々の会話ややりとりに基づきひとりひとりのやりたいことを引き出しています。その一連の流れの中には「促されている・やらされている」様子は

全く感じられません。こうしたスタッフの日々の配慮により高齢者も自発的な行動をするようになり、ひいては自分の生きがいを感じられるのです。

(3)利用者家族・近隣住民

▶よき相談相手の獲得

介護や子育てをしている中で「誰かに相談したい」「話を聞いてほしい」と思うことが出てきても、なかなか相談できずに悩んでいる人もいます。家族の話だからこそ、家族の中では言いづらい。相談できる人はいるけれど遠方に住んでいるので相談しづらい。些細なことなので、わざわざ時間を取ってもらってまで相談することではないかもしれない。そんな思いを抱えている人々に対し、「また明日」はよき相談相手になってくれます。

「また明日」には、施設というよりまるで実家や親戚の家のような雰囲気が漂っています。いつでも誰でも歓迎されますし、皆リラックスし、取り繕うことなくありのままの自分でいられるように感じます。また、仕事然として「どうぞご相談ください」と言われるのではなく、スタッフや他の利用者の方々とお茶を飲みながら世間話とともに普段悩んでいたことを話すことができます。

「また明日」の利用者家族の声として、「ここに来れば相談に乗ってくれる」「なんとかなる」という声があります。「また明日」は安心できる場、信頼できる場として機能しています。

(4)行政・社会

▶住民の自立/地域力向上/まちの魅力向上

これまで自分の住む国・街・地域で何か困ったことがあっても、行政に対応を任せてどこか他人事にしてきた方は多いのではないのでしょうか。但し、これからは様々な社会問題（高齢化等）により、今までのやり方では確実に対応しきれません。私たちには今、一人ひとりが目の前の課題に「自分事」として関わることを求められています。また、そうすることで各地域の住民が主体となって多様なコミュニティが生まれ、顔の見える安全な地域となり、ひいては地域全体の魅力向上に繋がるのです。

▶空き家対策

「また明日」は1階5世帯をリフォームし、1つの空間にして運営しています。実際に訪れた際に、利用者がまるで親戚の家に遊びに来ているかのようにリラックスした様子だったのは、もともとが住居であったということも大きいのではないかと感じました。現在日本では高齢化に伴い空き家問題も深刻ですが、こういった多世代コミュニティ施設として利用することで、解決の一助になるのではないかと思います。実際「また明日」にはリノベーションを手掛ける企業からの問い合わせもあったそうです。

(5)相互が関わり合うところ (図の☆部)

「また明日」は前述の3者（利用者、利用者家族・近隣住民、行政・社会）のハブ・良きまちのコーディネーターとして機能し、次のような効果が生まれています。

▶課題解決の手助けとなる

「また明日」は、利用者や地域住民だけでなく、行政や地域の企業、団体などとも積極的に関わっており、彼らの出入りもあります。何か困ったこと・やりたいことがあった際に「また明日」に来れば何か解決するかも、とそれぞれが訪れることにより、双方をよく知る「また明日」を介して良いマッチングをすることができます。

▶孤立防止

育児や介護というのは、往々にして悩みや問題を抱え込み孤独になりがちです。「また明日」は地域と密接に関わっているため「何かあったらここにひとまず話してみよう」と考える方が多くいます。孤立しそうな人たちにとって、いつでも相談できるという「拠り所がある」ということで心の支えになっています。

▶防犯力強化

「また明日」を通じて地域住民が顔見知りになることは、まちの安全性を高めます。例えば「また明日」主催のワークショップで地域の商店主と子どもが顔見知りになったり、住民の近況をお互いに気にしあう関係が生まれ、地域ぐるみの見守りや防犯力強化につながっています。

4 | 利用者との関わりのポイント

森田夫妻の想いのもと、居心地のよい、温かい居場所を作るにはスタッフの関わり方がとても大切になります。スタッフが利用者とのように関わっているのか、どのように居場所を作っているのかを見ていきます。

(1) “先回りをしない”を念頭に置いている。

①理由

現代社会は時間に追われています。それは効率という意味で良い面もありますが、人生においても“余白”を楽しむ時間があってもよいと思います。その余白で生まれる交流や発見に大きな意味があり、“待つことの先にあるもの”を大切にしています。

②光景

- ・子どもが鼻水を出していてもスタッフがすぐに拭かないことがある。それに気が付いたお年寄りが拭いてあげ、そのついでに子どもの頭を撫でる。または子どもが「〇〇さん拭いて！」と寄ってきて、「ありがとう！」と満面の笑みを見せたりする。そこから触れ合いが生まれる。
- ・先回りをしないということはスケジュールを決めないという運営方針にも表れている。だからこそ、散歩の途中で子どもが道端のテントウムシに興味を持った時に、帰宅時間を気にせずとことん子どもの興味関心に寄り添い観察をする。お散歩に行きたくない子は無理に散歩に行かせず、「お部屋で何をしようか？」と声をかけるし、時間を決めて午睡から起こすこともしない。

(2) 子どもとお年寄りの交流を促すようにしている。

①理由

世代を超えた、実際の行動が伴う交流を促しています。お互いの体に触れたり、声を掛け合ったりして、自分の行動が相手に伝わる様を間近に見ることで、互いに支え合う（与え・受け取る）存在になります。

②光景

- ・重度の認知症で普段は表情が乏しいお年寄りが、子どもを抱っこするだけで優しい笑顔を見せることがある。実際に訪問した際も、私たちの前では硬い表情だったお年寄りが、0歳児を抱っこした瞬間にとっても穏やかな笑顔を見せていた。
- ・スタッフが子どもたちに「あのおばあちゃんは、こんなことが得意なんだよ。聞いてきてごらん。」「〇〇さんにしてもらったら？」等の声掛けをしている。そのことにより、子どもが本やぬいぐるみをもって、自らおばあちゃんの膝に座りに行っている姿が見られた。
- ・泣いている子どもがいたら、スタッフがお年寄りを巻き込んで「どうしたの？」と声をかけて、お年寄りが抱っこしてあやしていた。

(3) 利用者の自主性を促すような会話・行動をする。

①理由

自ら考え行動したり、他者との関わりの中で役割を担うことが、存在意義や生きがいの獲得に繋がります。

②光景

- ・「ちょっと鼻水を拭いてもらう」「ちょっと抱っこしてもらう」などの行動を促すようなスタッフの声掛けの積み重ねがあり、「私もお世話できるかもしれない、したい」というお年寄りの自主性を引き出している。中には保育士資格を有するお年寄りが自前のエプロンをつけ自主的に子どもたちの面倒を見始めた例もある。
- ・利用者に積極的に「頼る」発言をするようにしている。「〇〇さん、～がお得意でしたよね？分からないから教えていただけますか？」、「〇〇さんいないとこの子はダメなのよね。ちょっと抱っこしていただけますか？」などである。
- ・「みんながお姑さん」と言い、気軽に発言したり動きやすい雰囲気を作っている。
- ・季節行事（餅つき、ひな祭り、七夕など）はスタッフがお膳立てするのではなく、お年寄りや子どもたち皆で準備をして楽しむ。



5 | 「また明日」を支える運営・構造

(1) 「また明日」の運営について

それでは、「また明日」の実際の運営について、さらに詳しく見ていきましょう。森田夫妻の思いが「また明日」の日々の運営に、どのように反映されているかを見て取ることができます。

【デイホーム・保育所・寄り合い所の利用者】

施設での過ごし方	<ul style="list-style-type: none"> ・スケジュールやプログラムはない。 ・利用者の自主性を尊重し、それぞれのペースに合わせて過ごしている。 (天気が良ければ散歩へ行く、話をする、合唱する、昼寝をしたい子は寝て、したくない子は起きて遊んでいるなどそれぞれがしたいことをして過ごす。等)
----------	--

【スタッフ】

求める資格、人物像	<ul style="list-style-type: none"> ・資格不問 ・自然と周りに敬意を払い行動できる人。 ・何も言わずにお年寄りの前を横切る方はNG。 ・てきぱき動く人は隙がなくお年寄りや寄り合い所へ来た方が声を掛けにくい。「また明日」では、のんびりとした雰囲気の人が良い。
採用方法	<ul style="list-style-type: none"> ・面談の後、応募者に1時間ほど利用者と同じ空間にいてもらい、その時の立ち居振る舞いや利用者への声かけの姿をよく観察し、採用を決める。
理念をスタッフへ浸透させるための共有方法	<ul style="list-style-type: none"> ・毎月のミーティングやその都度必要な時に説明する。 ・「私はこう思うけど、どう思う？」というやりとりを通して、スタッフ自身が自分で考えて行動できるようにしていく。 ・新人スタッフには利用者とベテランスタッフのやり取りを1年間くらい観察してもらい、具体的な動き（単なる作業ではない）を身に付けてもらう。 ・利用者へ接する際、すぐに反応するのではなく状況を見極めて行動するように伝えている。何かあった時にそこに集中してしまうと、他への注意が行き届かなくなるため。
役割分担	<ul style="list-style-type: none"> ・毎朝のミーティングで打ち合わせを行い、デイホームと保育所の担当を決めているが、その場の状況に応じて、全員が臨機応変に対応している。
ミーティング・研修	<ul style="list-style-type: none"> ・ミーティングは毎朝のものと、毎月実施しているものがある。 ・月例のミーティング時に研修を行うこともある。
日誌の記録	<ul style="list-style-type: none"> ・保育所主任とデイホーム管理者のみ毎日記録。

周辺業務	・洗濯干しや洗い物の片付けなどの仕事は隙間時間に手が空いた人が行う。
------	------------------------------------

【その他】

福祉施設と地域との関わり方	<ul style="list-style-type: none"> ・その地域社会に受け入れられることが大切である。「また明日」の場合は地域の方と良好な関係を持つ大家さんと一緒に、最初にご近所へ一軒一軒挨拶回りに行った。 ・森田夫妻は施設の上に引っ越してきてまず町内会に入った。そうすることで自分たちも生活者の視点が持て“地域密着型”のサービスを行うことができている。
支援者	<ul style="list-style-type: none"> ・立ち上げ時から「また明日」の構想を色々なところで話す事で支援者を増やした。 ・人を紹介してもらった事で様々な障害を乗り越えられた。 ・最初に良い人に出会うことは重要。 ・理事のメンバーにはあえて福祉関係の人だけではなく、思想等の偏りが無いようバラエティに富んだ人々にお願いしている。例えば、その土地で顔の利く人などがいる。
動物	<ul style="list-style-type: none"> ・施設で飼っている動物のための柵ではなく、基本的に施設の中を自由に行き来して、利用者と触れ合い過ごしている。 ・デイホーム利用者の入院時など、飼育が困難な時に「また明日」で預かる事もある。

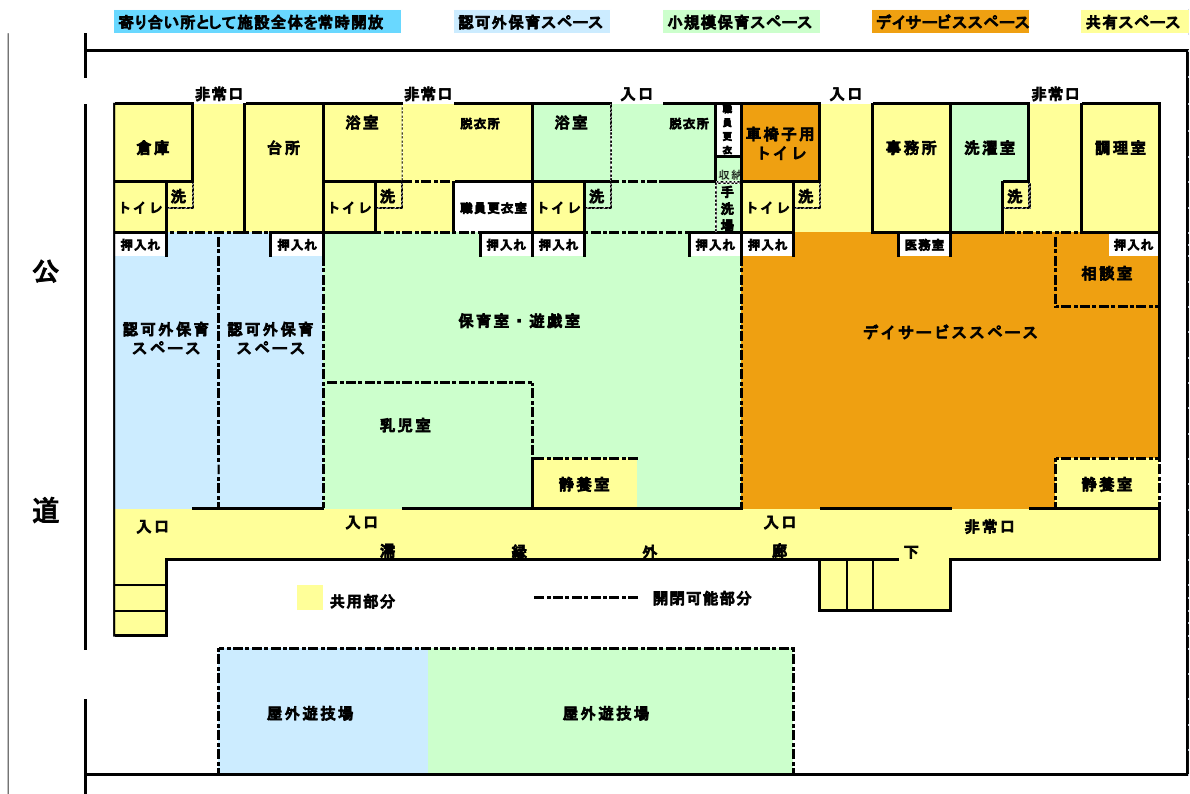
(2) 「また明日」の建物の構造・レイアウト

「また明日」は良い意味で施設感を全く感じません。田舎の大きな家で親戚一同が過ごしているような不思議な気持ちにさせてくれる居心地の良い空間です。

そんな「また明日」の周辺環境や外観、室内環境についてお話しします。

物件との出会い	<ul style="list-style-type: none"> ・アパートの一階部分が全て空室だったのを見て、壁を取り払えば使えるのではと閃いた。 ・大家さんも一階部分をグループホームにしたいと思っていたが、施設運営が困難で頓挫していた。 ・森田夫妻との出会いは大家さんにとっても渡りに船だった。
周辺の環境	<ul style="list-style-type: none"> ・駅からもバス停からも少し離れた場所に位置し、住宅街の奥まった場所にある。
建物	<ul style="list-style-type: none"> ・2階建てアパートの1階5世帯の壁を取り払い1つの大きな空間にリノベーションして利用している。 ・施設利用者が保育所の子どもや認知症のお年寄り、そして寄り合い所でもあるため、立ち寄りやすい1階部分であることは大切なポイントである。 ・ベランダ側に入り口があり靴を脱いで入る。
施設のレイアウト	<ul style="list-style-type: none"> ・以下、平面図にある通り、デイホーム・保育所・寄り合い所と分けられている。

<p>(下図参照)</p>	<p>るが、実際にはそれぞれの場所に椅子・テーブル・ベッドが配置されており、利用者が過ごしたい場所で自由に過ごしている。それにより自然と交流が生まれる。 ・両端の部屋はデイホーム利用者が個室としても利用できるよう配慮されている。</p>
<p>施設内の什器</p>	<p>【全体】 ・施設内の家具は介護用ベッドを除き自宅で使用している普通の家具で揃えられている。 ・装飾品（カレンダーや壁掛け時計等）も一般的な自宅で使用しているもの。 【デイホーム】 ・ダイニングテーブルと椅子が配置されている。 【保育所】 ・子どもたちが自由に遊べるように、おもちゃや絵本が用意されている。 ・午睡用の布団はひとりひとつではなく、大きな布団を何人かで一緒に使う。バウンサーを利用して寝る子どももいる。 【寄り合い所】 ・ローテーブル（コタツ）を囲むように座布団、ソファや椅子が配置されている。何となくみんながそこに集まり、話をしたり合唱して過ごすことが多い。</p>
<p>その他設備</p>	<p>・床暖房完備で、靴を脱ぎ畳の上でゴロゴロと自由に過ごせる。 ・太陽光パネルを設置しており、「また明日」発電所を併設している。天災時には近隣に施設を開放する準備がある。</p>



6 | 最後に

【森田夫妻より】

知って欲しいこと、伝えたいことは、「また明日」のことというより、子どもや高齢者の、実はすごいんだぞ！というところです。

私たち(その中間世代や親や福祉職)は、つい、子どもだから、高齢者だから、障がい者だからと、決めつけていないか、本人たちにとって、不本意な、失礼な態度をとっていないかと思っています。

でも、みんな、独立した個として、生き生きとしている。しっかりと関わっている。そのことを理解しているならば、子どもを虐待することも障がい者だと偏見を持つことも、認知症だからと悲観的に見ることもなくなるはずだと思っています。

【ママボノチームより】

「また明日」は、デイホーム・保育所・寄り合い所の三位一体の心を寄せ合う空間として、利用者が自然体で過ごすことができる居場所です。

自然発生的にその姿に至ったような空気をまとっていますが、その裏には森田夫妻の熱い想いや、よく考えられた利用者との関わり方、スタッフの自然な振る舞い、環境設計など多くの「仕掛け」が巡らされていることがお分かりいただけたかと思います。

ここに至るまでには様々な困難もあるかと思いますが、3章で述べたようなさまざまな社会的な意義を担う素晴らしい活動です。

本誌がこのような活動を志す皆様の一助に成れば幸いです。

以上



委員からのコメント

— この冊子の活用にあたって —

この『地域づくりの台本』は、2018年に4回にわたる委員会でディスカッションを行いながら、企画、制作を行いました。

※掲載は五十音順



浅川澄一 氏（福祉ジャーナリスト）

日経トレンディ初代編集長。日経新聞の記者として40年勤務。

元日経新聞編集委員。現在は福祉ジャーナリストとして執筆・登壇等活動中。

「また明日」は、介護保険の認知症デイホームと小金井市の独自保育所、それに誰でも来ていい寄り合い所と一緒に広い空間で行っています。その空間は、2階建てアパートの5部屋をぶち抜いたというユニークなもの。全国的に見ても稀有な事例です。この施設では、立ち上げにはじまり、日々の運営にあたって、様々なリスクを超えてすべての人にとって心地よい空間を作っていくための工夫がいたるところに詰まっています。保育士、そして介護福祉士でもある代表の森田夫妻は、人生をかけてこの場所をつくっている。



坂倉杏介 氏（東京都市大学 都市生活学部 コミュニティマネジメント研究室 准教授）

慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所特任講師を経て現職。「芝の家」や人材育成事業「ご近所イノベーション学校」運営のほかコミュニティ形成プロジェクトに多く携わる。三田の家LLP代表。

運営をしていく中ではリスクヘッジといった事も必要ですが、外部リソースのコーディネート、内部変化のマネジメント、用意した空間・場所、そこに来た人、その関わり合いによる変化によって「場」は出来ていきます。「また明日」では、スタッフ自身のなかで、行動規範をしっかりと育て上げようとしている。その基盤があったうえで、赤ちゃんからお年寄りまで多様な人々が入り出している。訪れた人の主観的な体験だけではない評価の視点を持ち、敏感にならなければならない。そういった事をスタッフとどう共有しているのかは、参考にしたい点です。



広石拓司 氏（株式会社エンパブリック 代表取締役）

シンクタンク、NPO法人ETICを経て、2008年株式会社エンパブリックを創業。環境省SDGs人材研修事業委員・講師、慶應義塾大学総合政策学部、立教大学大学院などの非常勤講師も務める。

「また明日」にはマニュアルがないと言いますが、そのなかでやっているスタッフのちょっとした目配せや声かけ、特に注意して見ているポイント、ケアしている所、そこが大切だと思います。効率でもない、ルールでもない、「何」を大切なものとして、スタッフとの間で共有しているのか、代表の森田さん夫妻が日々見ているものの中に「また明日」の重要な部分、運営のヒントがたくさん詰まっています。

『地域づくりの台本』

－ 地域づくりのエッセンスとディテールを描いた虎の巻 －

地域づくりに「正解」などない。だけど、地域づくりで「成果」を収めている事例はある。ここでいう成果とは、メディアに取り上げられたとか、誰かに表彰されたとかではなく、そこに関わる人が、自分の居場所を見つけ、新しい人とのつながりが生まれ、このまちの暮らしに安心や満足感がはぐくまれること。その地域づくりの活動には、どんな考え方があって、日々の運営は具体的にどのように行われているのか。『地域づくりの台本』は、地域づくりの現場の様子を掘り下げ、そのポイントを詳細に描き出すことで、“読んだ後に実行に移したくなる”を目指した事例集です。



板橋区「地域リビングプラスワン」

“誰でも受け入れる”から生まれる
日常をシェアする居場所

高齢化が進む住宅団地の中で20代～80代までが集うコミュニティカフェ「地域リビングプラスワン」。日常をシェアするというコンセプトのこのあたたかな空間を支えている、多様性を受け入れる運営のポイントとは？



文京区「こまじいのうち」

あえてつくる“ゆるやかさ”
楽しく巻き込む運営のヒント

バザーや子ども食堂、落語や体操など「こまじいのうち」には日々いろいろな世代の多様な人たちが集います。ほぼ毎日何かがある行事カレンダーを支える、地域の多様な団体を巻き込む体制づくりのヒントとは？



小金井市「また明日」

デイホーム・保育所・寄り合い所
三位一体の“心を寄せ合う空間”

高齢者のデイホーム、乳幼児の保育や一時預かり、そして近隣の小中学生まで誰でも立ち寄れる寄り合い所。これらを三位一体で運営する「また明日」が、多世代交流を楽しく安全に実現するために、日々スタッフに伝え続けていることとは？

『地域づくりの台本』は、ウェブサイトからご覧になれます

<https://hometown.metro.tokyo.jp/>

東京ホームタウン

検索